

一寸怪

泉鏡花

青空文庫

怪談の種類も色々あつて、理由のある怪談と、理由のない怪談とに別けてみよう、理由のあるというのは、例えば、因縁談ばなし、怨靈などという方で。後あとのは、天狗てんぐ、魔まの仕業しわざで、殆どほとん端睨たんげいすべからざるものを云う。これは北国ほつくく辺へんに多くて、関東には少ない様に思われる。

私は思うに、これは多分、この現世以外に、一つの別世界というような物があつて、其処そこには例の魔まだの天狗てんぐなどという奴が居る、が偶々たまたまその連中が、吾々われわれ人間の出入でいりする道を通つた時分に、人間の眼に映ずる。それは恰あだかも、彗ほうきぼし星ぼしが出るような具合に、往々おうおうにして、見える。が、彗ほうきぼし星ぼしなら、天文学者が既に

何年目に見えると悟っているが、御連中ごれんちゆうになると、そうはゆかない。何日いつ何時なんどきか分らぬ。且かつ天の星の如く定きまつた軌道といふべきものもないから、何処どこで会おうかもしれない、ただほんの一瞬間の出来事と云つて可いい。ですから何日いつかの何時頃、此処ここで見たら、もう一度見たいといつても、そうは行ゆかぬ。川の流ながれは同じでも、今のは前刻さつきの水ではない。勿論もちろんこの内にも、狐狸こりとか他の動物の仕業しわざもあろうが、昔から言い伝つたえの、例の逢魔おうまが時ときの、九時から十一時、それに丑満うしみつというような嫌な時刻がある、この時刻になると、何だか、人間が居る世界へ、例の別世界の連中が、時々顔を出したがる。昔からこの刻限を利用して、魔の居るのを実験する、方法があると云つたようなことを過このあいだ般な仲ちゆうの町

で怪談会の夜中に沼田ぬまたさんが話をされたのを、例の「膝摩り」ひざさすとか「本叩き」ほんたたといったもので。

「膝摩り」ひざさすというのは、丑満頃うしみつ、人が四人で、床の間なしの八畳座敷よすみの四隅おのおのから、各一人ずつ同時に中央まんなかへ出て来て、中央まんなかで四人出会ったところで、皆みんながひったり座る、勿論もちろん室の内あかりは燈をつけず暗黒まつくらにしておく、其処そこで先まず四人の内あかりの一人が、次の人の名を呼んで、自分の手を、呼んだ人の膝へ置く、呼ばれた人は必ず、返事をして、また同じ方法で、次の人の膝へ手を置くと、いう風にして、段々だんだん順を廻すと、恰度ちやうどその内に一人返事をしないで座っている人が一人増えるそうぞうで。

「本叩き」というのは、これも同じく八畳の床の間なしの座敷を

暗がりにして、二人が各手に一冊宛本を持って向合いの隅々から一人宛出て来て、中央で会ったところで、その本を持って、下の畳をパタパタ叩く、すると唯二人で、叩く音が、当人は勿論、襖越に聞いている人にまで、何人で叩くのか、非常な多人数で叩いている音の様に聞えると言います。

これで思出したが、この魔のやることは、凡て、笑声にしても、唯一人で笑うのではなく、アハハハハと恰も数百人の笑うかの如き響をするように思われる。

私が曾て、逗子に居た時分その魔がさしたと云う事について、こう云う事がある、丁度秋の中旬だった、当時田舎屋を借りて、家内と婢女と三人で居たが、家主はつい裏の農夫であつ

た。或^{ある}晩私は背戸^{せど}の据風呂^{すえ}から上つて、椽側^{えんがわ}を通つて、直ぐ傍^{すわき}の茶の間に居ると、台所を片着^{かたづ}けた女中が一寸^{ちよいとうち}家まで遣^やつてくれと云つて、挨拶をして出て行く、と入^{いれちが}違いに家内は湯殿に行つたが、やがて「手桶が無い」という、私の入つていた時には、現在水が入つてあつたものが無い道理はない、とやつたが、實際見えないという。私も起^たつて行つて見たが、全く何処^{どこ}にも見えない、奇妙な事もあるものだと思つたが、何だか、嫌な氣持のするので、何処^{どこ}までも確^{たしか}めてやろうと段々^{だんだん}考えてみると、元来^{もと}この手桶というは、私共が転居^{ひっこ}して来た時、裏の家主^{やぬし}で貸してくれたものだから、もしやと思つて、私は早速^{さつそく}裏の家^{うち}へ行つて訊ねてみると、案の条、婆さんが黙つて持つて行つたので。その婆さん

が湯殿へ来たのは、恰度私が湯殿から、椽側を通つて茶の間へ入つた頃で、足に草履をはいていたから足音がしない、農
夫婆さんだから力があるので、水の入っている手桶を、ぎぶりと
とも言わせないで、その儘提げて、呑気だから、自分の貸したも
の故、別に断らずして、黙つて持つて行つてしまつたので、少し
も不思議な事はないが、もしこれをよく確めずにおいたら、おかし
な事に成ろうと思う。こんな事でもその機会がこんがるか
と、非常な、不思議な現象が生ずる。がこれは決して前述べた魔
の仕業でも何でもない、ただ或る機会から生じた一つ不思議な談
これから、談すのは例の理由のない方の不思議と云うやつ。

これも、私が逗子に居た時分に、つい近所の婦人から聞いた談、

その婦人がまだ娘の時分に、自分の家うちにあつたと云うのだ。静しずお
 岡かの何でも町まちはず端はずれが、その人の父が其処そこの屋敷に住んだとこ
 ろ、半年はんねんばかりというものは不思議な出来事が続け様さまで、発端
 は五月頃、庭へ五六輪、菖蒲あやめが咲さいていたそうのでその花をひとあさ一朝奇
 麗にもぎつて、戸棚の夜着やぎの中に入れてあつた。初めは何か子供
 の悪戯いたずらだろうくらいにして、別に気にもかけなかつたが、段だんだ
 々と悪戯いたずらが嵩こうじて、来客の下駄からかさや傘かさがなくなる、主人が役所
 へ出懸でかけに机の上へ紙かみいれ入いれを置いて、後うしろむき 向むきに洋服を着ている
 間まに、それが無くなる、或時あるは机の上に置いた英和辞典を縦横たてよこ
 に絶切たちきつて、それにインキで、輪のようなものを、目茶苦茶あに悪
 書くがきをしてある。主人も、非常に閉口したので、警察署へも依頼

した、警察署の連中は、多分その家に七歳になる男の児があつた
 が、その行為しわざだろうと、或時あるその児を紐で、母親に附着くっつけてお
 いたそうだけれども、悪戯いたずらは依然止まぬ。就中なかんずく、恐ろしか
 ったというのは、或晚ある多勢おおぜいの人が来て、雨落ちあまおの傍そばの大きな水
 瓶みづがめへ種々いろいろな物品ものを入れて、その上に多勢おおぜいかかつて、大石を
 持つて来て乗せておいて、最早もうこれなら、奴も動かせまいと云つ
 ていると、その言葉の切れぬ内に、グワラリと、非常な響ひびきをして、
 その石を水瓶みづがめから、外へ落したので、皆みんなが顔色を変えたと云う
 事。一時あるときなどは椽側えんがわに何だか解らぬが動物の足跡が付いてい
 るが、それなんぞしらべて丁度障子の一小間ひとこまの間を出入するほ
 どな動物だろうという事だけは推測出来たが、誰たれしも、遂にその

姿を発見したものはない。終には洋燈を戸棚へ入れるというよう
 な、危険千万な事になったので、転居をするような仕末、一時
 は非常な評判になつて、家の前は、見物の群集で雑沓して、売
 りものだな
 物店まで出たとの事。

これと似た談が房州にもある、何でも白浜の近方だつ

たが、農夫以前の話とおなじような事はじまつた、家が、丁

度、谷間のようなところにあるので、その両方の山の上に、猫

夫を頼んで見張をしたが、何も見えないが、奇妙に夜に入る

とただ猫夫がつれている、犬ばかりには見えるものか、非常

に吠えて廻つたとの事、この家に一人、子守娘が居て、その娘は、
 何だか変な動物が時々来るよといつておつたそうである。

おんな

同じ様に、

越前国丹生郡天津村

の風巻

という処に善

照寺しょうじという寺があつて此処ここへある時村のものが、貉むじなを生取つて

来て殺したそうだが、

丁度ちやうどその日から、寺の諸所しよしよへ、

火が燃

え上るので、住職も非常に困つて檀家だんかを狩集かりあつめて見張みはるとなると、見ている前で、障子がめらめらと、燃える、ひやあ、と飛とびついで消す間に、梁うつぱりへ炎が絡む、ソレ、と云う内羽目板から火を吐出ふきだす、凡およそ七日ばかりの間、昼夜詰切つめきりで寝ねる事も出来ぬ。ところが、此寺ここの門前に一軒、婆さんと十四五の娘の親子二人暮しの駄菓子屋があつた、その娘が境内けいないの物置に入るのを誰かがちらりと見た、間もなく、その物置から、出火したので、早速さつそく馳付かけつけたけ

れども、それだけはとうとう焼けた。この娘かと云うので、拷問

めいた事までしたが、見たものの過失で、焼けはじめの頃自分の内に居た事が明あきらに分つて、未だいまに不思議な話になっているそうである。初めに話した静岡の家にも、矢張やっばり十三四の子守娘が居たと云う、房州にも矢張やっばり居る、今のにも、娘がついて居る、十三四の女の子とは何だかその間に關係があるらしくなる。これは如何ういうものか、解らない。昔物語にはこんな家うちの事を「くだ」付き家いえと称して、恐こわがっている。「くだ」というのは狐の様で狐にあらず、人が見たようで、見ないような一種の動物だそうだ。

猫つらの面で、犬の胴、狐しりつぽの尻尾おおきで、大さは鼬いたちの如く、啼なくこえぬえ声鶴えに似たりとしてある。追おって可かんがうべし考え。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選・特別篇 百物語怪談会」ちくま文庫、
筑摩書房

2007（平成19）年7月10日第1刷発行

底本の親本：「怪談会」柏舎書楼

1909（明治42）年発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年11月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一寸怪

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>